

大津市北部から高島市にかけて比叡・比良山系が連なり、日が沈むころになると夕日が山々を背にした湖面を鮮やかな朱色に染めます。古くから琵琶湖の西を西方浄土に見立て、時の権力者や民衆は来世の安住を願ったといわれています。

湖西を走る国道161号沿いの大津市比叡辻に、聖衆来迎寺があります。延暦9年(790年)に天台宗の祖伝教大師が創建した寺で、浄土信仰ならびに阿弥陀信仰の色彩の濃い寺院です。寺名の「聖衆来迎」とは、人の臨終の際に、西方極楽浄土から阿弥陀如来と諸々の聖衆(菩薩)が現れて、亡者を迎えに来る(来迎)との意味があります。

この寺には、地獄や極楽の様子が克明に描かれた六道絵(鎌倉時代・国宝)が伝えられています。六道絵とは、

『往生要集』をやさしく絵解きしたものです。往生要集は、浄土信仰の基盤を築くとともにその布教に力を注いだ、平安時代中期の天台宗の僧であった恵心僧都源信が著しました。それには、この世の生き物は、因果応報により六道すなわち地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天に生死をくり返しており、とくに人はこれらの苦悩や苦行難行を克服し、極楽往生への願いをかなえるために、ただただ一心に念仏をあげる以外に方法はないと説いています。

六道絵を少し見てみますと、「等活地獄」と題された絵のなかには、赤鬼、青鬼が金棒を振り回しながら逃げ回る人々を追いかけ、次々に捕らえては八つ裂きになっている凄惨な光景が描かれています。そこはまさに地獄のスペクタクルが展開されています。さらに「閻魔王庁」の幅で

は、地獄に落ちた人々の生前の善行悪行のふるまいが鏡に映し出され、閻魔王がこれ

聖衆来迎寺蔵の六道絵



聖衆来迎寺の表門。坂本城から移築されたと伝えられる

ときに、「嘘をついた子は閻魔さまに舌を抜いてもらう」といって、いい子になる約束をさせたものです。閻魔さまは、地獄において絶対的な権力を持っており、誰も逆らうことができない存在です。

一方「畜生道」の幅には、家畜が田畑を耕したり重い荷車を引いたりして、人に酷使されているさまがリアルに描かれています。画面に登場する動物たちは、使役されるがままで自力で仏の教えを得ることができないあわれな存在として表現されています。別の観点から見ると、牛が犁を引き、馬が馬鍬を引く光景は、当時の農耕具の使用法を克明に伝える絵図として民俗学的にも注目されます。

さて、六道絵をはじめとする聖衆来迎寺が所蔵する寺宝の数々はずつと安泰であったわけではありません。とくに、織田信長の比叡山焼き討ちがよく引き合いに出されま

す。元龜2年(1571年)信長率いる軍勢が比叡山のふもとの寺院に攻め込んできました。当時のこの寺の住職は、その対処法として仏像や仏具などの数々を船にのせ、災難の及ばないところへ避難させることになりました。その避難先は、琵琶湖の対岸の野洲市にある兵主大社でした。ほとぼりの冷めるまで数カ月の間、この地で退避されました。その結果、寺の努力もあって聖衆来迎寺は焼き討ちを免れたと伝えられています。

湖にまつわる西方浄土信仰

かつてはお盆になると、地獄絵を所蔵する多くの寺では虫干しをかねてお堂に絵をかけて、お参りに来た人々に絵解きする行事がありました。参拝者に地獄絵を披露することで地獄の恐ろしさを体験してもらい、日ごろの行いを反省してもらうのがねらいでした。聖衆来迎寺では、先祖の霊を迎え供養するために、毎年8月15日を中心に営まれるお盆の行事でこれらの寺宝を公開しています。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 中川正人)